

第260回くらしの植物苑観察会 令和2年11月28日(土)

菊の番付

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

さまざまな園芸品種において、相撲見立番付(相撲の役付を記した番付の体裁にならって順序づけて人名などを記したもの)の形式で、品種名を列挙する場合は数多い。ここでは、番付の形式からわかるさまざまな情報を紹介する。

花菖蒲と朝顔の番付

花菖蒲の番付(図1)は、「大関」「関脇」「小結」「前頭」「行司」「年寄」「勸進元」「差添」といった相撲の役付を用い、まさに相撲見立の形式をそのまま踏襲している。本番付は、明治35年(1902)6月に、植物学者・伊藤篤太郎が東京堀切の小高園から入手した近代の番付である。品評会の花の優劣を競うのではなく、花の品種を並べているのみで、実際は小高園の商品カタログの目的で板行された。

図2の朝顔の番付は、左右(東西)に分かれて競う相撲見立番付の形式を持つ。朝顔は、その花色から文字を青色に刷るものが多い。趣味の印刷物である相撲見立番付に年月日を載せることは少ないが、「いつ



図1 花菖蒲番付 国立国会図書館蔵



図2 嘉永4年(1851)7月10日「朝顔花合」個人蔵

「どこで」咲いた花かが問題になる朝顔の希少性のため、年月日・会場が記される場合が多い。

江戸時代の菊の番付

江戸時代の菊花の流行は、19世紀に流行した朝顔や花菖蒲より早く、18世紀には京都、大坂、江戸で出版された書物から花名が判明する。しかし、番付が登場するのは19世紀になってからで、これは他の植物から影響を受けたからであろう。

図3の番付はこれまでと異なり横型になっている。相撲見立ではなく、歌舞伎の番付などと同じく、菊独自の階級(「惣無



図3 「中菊花位附」国立国会図書館蔵

極」「無極」「最上金瑞」「金瑞」など) ごとに右上から左下へ向かって順位付けをなしている。ただし、江戸時代でも従来形式の縦型で、花菖蒲で見たような植木屋の商品カタログの性格を持つ番付も存在する。

明治時代の菊の番付

明治時代の番付は、伝統的な縦型の相撲見立の形式を持つものが多い。団子坂の植木屋が作成した番付(図4)は商品カタログの性格を帯び、花菖蒲の番付に近い。また「曲咲」(=江戸菊)や、「鉢造」(=鉢植の菊限定)、というように、多様な個性に合わせてそれぞれ番付が作成された。

図4の「曲咲」の「曲」は、「曲がった」の意味のほか「曲芸」のように技巧を凝らした、種々の変化があることをいう。つまり、「曲咲」とは、「芸菊」とも呼ばれた江戸菊のことを指す。黄菊46、白菊46、薄菊61、赤菊31、紫菊20、絞り5、計209種の江戸菊の名鑑。1軒の植木屋が作成したもので、菊以外の種々の草花(牡丹、芍薬、花菖蒲、桜草)の販売も視野に入れた、商品広告の性格を持つ番付である。

図5は、新潟・山形における菊の品評会の番付。酒田・鶴岡・長岡など広範囲から出品者を募った鉢植の形態に限った品評会の番付。会主は酒田の芳瀉忠三郎。資料名の「菊相撲」はもとより「大関」「関脇」「小結」「前頭」「行司」「初切」といった相撲用語を多く用いている。裏書「大信寺様」、右欄外「番附販不仕候」とあることから、他の番付同様、売買されず贈答されたとわかる。また、右下に「小菊角力部」とあることにより、江戸時代にはどれだけ大輪であるかが重要であったのに対し、小菊の鉢植が観賞の対象になった点も判明する。



図4 明治15年(1882)以後「曲咲大輪ノ菊」個人蔵



図5 明治20年(1887)11月3日「風流鉢造菊相撲」個人蔵

.....

次回予告 第261回くらしの植物苑観察会 令和2年12月19日(土)

「体験講座 桜草を植え替えてみよう」(当館博物館事業課 山村聡)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要